

●『東方』二八五号より

熊十力哲学の再評価へ向けて

末本文美士

熊十力（一八八五—一九六八）は、二十世紀の中国を代表する哲学者であるが、必ずしもそれにふさわしい正統な評価を受けてきていない。むしろ、吾妻氏が適切に指摘するように、「つい二十年ほど前まではまさに『忘れられた哲学者』でしかなかった」（本書解説、二七九頁）。一九八〇年代に「新儒家」が注目され、再評価されるようになったが、日本ではいまだに「忘れられた」というか無視された状態が続いている。

それはひとつには恐らく、日本の現代中国研究者が、多く共産革命以後の新中国の体制への共感から研究に入っており、その価値観から抜け出せないということがあるのではないだろうか。したがって、思想的に見れば、新文化運動、五・四運動からマルクス主義へという流

れが正統視され、それに反したり、あるいは異なる方向へ向かう動向は、簡単に反動として切り捨てられ、十分な評価を受けてこなかった。とりわけ「新儒家」は、中国で無視されていた間に台湾で継承され、また、中国での再評価が中国主義的な民族主義の動向と結びつくところから、警戒を持って受け止められているようにみえる。その象徴的な例が、日本の現代中国研究の水準を示す『岩波現代中国事典』（一九九九年）に熊十力の項目がないことで、わずかに吾妻氏執筆の「新儒家」の項目にその名前が見えるものの、索引にも採録されていないというほど徹底した無視ぶりである。

そのような中で、こつこつと地道な努力により、主著『新唯識論』全巻の和訳を成しとげた吾妻氏の努力は特筆に価する。『新唯識論』は一九三二年に発表されたものであるが、文語体（文言文）で書かれ、後に著者自身の手で口語体（語体文）に直されるとともに、大幅に増補がなされた（一九四四年）。前者は文言文の独創性はすでに文言文本文に十二分に発揮されているので、文言本文をもとにして、語体本文は注釈的に参照するところから出発するのが適当である。本訳書もその方式によっている。

しかし、それにしても『新唯識論』は分かりやすいテキストではない。本書が十分な評価を得られなかった最大の理由は、上述のような複雑な背景よりも、まず本書の難解さに求めるべきであるかも



熊十力著／吾妻重二訳
新唯識論

A5判 328頁
関西大学出版部 [3885円]

しれない。吾妻氏が、『新唯識論』の凝縮された簡潔な文章は、仏教・儒教哲学の深い学殖とあいまって或る種の「むずかしさ」を含んでおり、今なお人々の十全な理解をはばんでいる」（本書解説、二八〇頁）と指摘する通りである。

氏の指摘のように、その難解さには二つの側面がある。ひとつは、きわめて「凝縮された簡潔な文章」という文体上の問題である。この点は、熊十力自身自覚的に相当な工夫をしており、本文を可能な限り簡潔に切り詰めるとともに、小字の自注を付して補うという独特のスタイルをとっている。もうひとつは、「仏教・儒教哲学の深い学殖」という内容上の問題である。これは単純に「学殖」だけの問題ではなく、それらを自家薬籠中のものとした上で、自らの思索によって徹底的に考え抜き、古い術語に新しい意味を与えたり、まったく新しい術語を使用している。その点では、日本の西田哲学の難解さに近いところがある。こうした難解さゆえに、正直に告白すれば、私自身、何度も原文に挑戦しながら挫折し、今回、

本訳書を頼りとしながら、どうにか全体像がおぼろげに分かってきたという段階である。本訳書の価値はきわめて大きなものがある。

本訳書は、文章表現的な面に関していえば、原文の「凝縮された簡潔な文章」をできる限り生かそうと工夫している。

中国の文言文を読む日本の工夫にいわゆる漢文訓読があり、その乱用は批判されるものの、原文の語彙を最大限生かして日本語の文脈に置き換えるという利点は無視できない。吾妻氏の訳は、いわば漢文訓読をまねて、基本的な術語はそのまま原文の語彙を用い、簡潔かつ格調の高い硬質の文体を日本語に移すことに成功している。例えば、最初の「明宗」章の冒頭は次のように訳されている。

いまこの論を造るのは、実体（真実の本体）は自心を離れた外在の境界ではなく、また知識の及ぶ領域にあるのではなく、ただ反求実証によってのみとらえられるものであることを、玄学の探求者たちに悟ってもらうためである。

（本書、一五頁）

このうち、「実体」の後の括弧内は訳者が意味を注記したものであり、また、「玄学」の独自のニュアンスは訳注に指摘されている。「実証」については、著者の自注が付されている。しかし、そうした工夫がありながらも、それでもこの文を読んで、必ずしもすんなり分かるわけではない。「境界」とか「反求実証」とかいう言葉にはやはり引かかる。それでも、できるだけ原文の語彙を生かしたのはひとつの見識であり、訳だけ読んでもある程度は原文のニュアンスや術語を知ることができる。

内容面に関していえば、かなり詳しい訳注や分かりやすい巻末の解説は、本書に未知の読者にとって、何よりの手引きである。もともと宋学を専門とする訳者は、他方で『大乘起信論』や禪語録の共同研究などを通して仏典にも通じており、本書のように中国古典と仏典の両方の知識を要求する著作の訳者として最適である。

さて、この書評は訳書に関するものであるが、原著自体が十分知られていない

状況に鑑み、以下、少し視点を変えて、仏教の観点から本書の位置づけを考えてみたい。本書が『新唯識論』を名乗る以上、『旧唯識論』なるものがなければならぬ。それは『成唯識論』の教学である。『成唯識論』は世親の『唯識三十頌』に対する注釈で、玄奘訳とされるが、大きな問題がある。もともと『成唯識論』として纏まったものはない。玄奘が弟子の慈恩基(窺基)の要求を容れ、護法(ダルマパラー)の注釈を正統として、それを中心に訳出したというのである。

『成唯識論』に基づく唯識学(法相学)は早く衰えたが、清末に楊文会が日本から注釈書を逆輸入して盛んになり、章炳麟らも大きな影響を受けている。とりわけ、楊文会の後継者歐陽漸は法相学を中心としており、熊十力も彼の支那内学院に学んでいる。一九二一年に熊は蔡元培に請われて北京大学で唯識学を講ずるようになったが、まもなく唯識の教義に疑問を感じるようになり、それまでの講義録を破棄して、自らの体系の構築に向かった。これが『新唯識論』として結実

したのである。

『新唯識論』は発表されるや、仏教側から激しい批判を浴びることになった。特に欧陽漸一派は、唯識を曲解するものとして徹底的な批判を加え、それに対して熊のほうも反論を展開した。欧陽漸の序を有する劉定権の「破新唯識論」と、熊の反論「破破新唯識論」は有名であるが、その後も欧陽漸の弟子呂澂と熊の間でやり取りが続いた(江燦騰『中国近代仏教思想的辯論と発展』台北・南天書局、一九九八、第一章参照)。

確かに熊十力は護法の唯識説を徹底的にひっくり返しており、その中心となる八識説や識転変説を採用しない。唯識説が個別意識の分析から阿頼耶識説に達し、そこから識論を展開するのに対して、熊は宇宙全体の変転して留まることのない運動こそ真実であるとして、その宇宙的な運動と我々の心の合一するところから、新たな心の哲学を展開している。その点では、護法唯識説を完全に離れているが、それでは仏教から離れているかと言うと、必ずしもそうも言えない。熊十

力研究の第一人者郭斉勇氏が適切にも指摘するように、天台・華嚴・禪宗などの真如説を中心とした系統の仏教に近づいている（郭斉勇『熊十力思想研究』、天津人民出版社、一九九三、第四章）。熊の思想は一種の真如縁起説と見ることもできる。

そればかりでなく、今日、護法の説はインド唯識学派の中でもきわめて特殊であることが分かってきている。そもそも識転変説自体が世親によって展開されたものであり、それ以前には見られない。

また、識転変とは、もともと「識の流れ」において、ある瞬間の識が直前の瞬間とは別のものとして発生すること（服部正明・上山春平『認識と超越（唯識）』、角川文庫、一九九七、一三七頁）であり、護法の解釈は必ずしも適切と言えない。熊が自らの思索に基づいて護法の唯識説に疑問を呈したのは、ある面では今日の梵本に基づく文献学的な研究を先取りするところさえあったと言える。

しかし、そうではあるが、本書の説を完全に仏教の枠内で解しうるかという点、それは言えない。だからと言って、「新

儒家」というレッテルに騙されて、単純に儒家に還元するのも適切ではない。あくまで西欧の衝撃を受け止めながら、伝統思想をもとにして新たな現代哲学の体系を構築してゆく作業と見るべきであろう。その際、とりわけ注目されるのは、転変を「翕（収斂）」と「闢（拡散）」の二方向の運動と見、前者から物質、後者から心が展開すると見るところにあり、前者から後者への媒介をなすものとして身体が考えられているところである。身体を媒介として、我々の心は宇宙的な運動と合一するのである。

個と全体の運動の合一という思想は、西田幾多郎の『善の研究』における純粹經驗論ときわめて近似しているが、『善の研究』の場合、身体的な要因は十分に考察されていない。また、西田では個の意識的努力が一気に無意識化して全体と合一するところに理想が見られるが、熊の場合、修学が重んじられ、あくまで主体の努力を重視しているところが注目される。このような個の徹底した努力という発想は日本の近代哲学で十分に展開

されなかった弱点であり、そのために個の責任が曖昧化することになった。その点の反省のためにも、今日、熊十力の哲学は改めて読み直すべき魅力に満ちており、決して過去の骨董品のな遺物ではない。本訳書によって、このような熊十力哲学再評価の基礎がようやく築かれたと言いうことができる。

（東京大学）